

遷暦と自誨

1 永遠の現在

孔子は、「十五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知り、六十にして耳順い、七十にして行つて矩を喩えず」といつている。私は今日まで人の大きい節々において、そうした崇高な発心もなければゆるぎのない自信もなく、ただ漫然と馬齢を重ねるうちに、到頭六十歳を迎えてしまった。といつて白楽天の詩に「非老亦非少」という言葉があるように、私は若くもないが、老い込んだとも思っていない。

顧みると、その間、大きい飛躍もない代わりに惨めな失敗もない、いわば平々凡々たるものであった。もつとも平凡に終始するということは、至難のことである。また得意の朝にも失意の夕にも、平常心を以て対処するということは、確かに立派なことである。私の六十年の生涯は、そんな素晴らしいものではなく、ただ幸に大きな風浪に遭遇しなかつただけのものであった。

宗教や哲学において、「永遠の今」ということが問われている。現在というものは、未来を指向する力と過去のもつ引力という相反した方向に働く二つの力の緊張した相剋の中にある。そして時間は、いつも現在という衣を着けてわれわれを訪れるものである以上、現在は永遠であり、襟を正して立向かわなければならぬものである。

人生は、したがって、日々刻々の真剣な実践の連続以外のものではないので、それに人為的な節を設けることは、便宜論以上のものではない。先に述べた孔子の述懐も、人生に節を設けるところに意味があるのではなく、日々の実践を通して達し得たその時点における孔子の自信を述べたものであろう。還暦を迎えた私は、これまで日々の実践において果たして悔いのない全力投球してきたかという点、これまたそんな自信はもてない。しかし平凡なこれまでの一日一日は、それなりに尊く有難いものであった。そして私は、その間私が知遇を得た人々に心から感謝している。

2 六十年間の変革の跡

私が生まれたのは一九一〇年で、第一次大戦の始まる四年前であった。西讀の中農の二

男として生まれ、南に阿讃の山並を仰ぎ、西に燧灘の銀波を見下しながら、郷里で小学校と中学を了えることができた。それからの半世紀に近い時代は、日本にとつても、世界にとつても、いわば有史以来空前ともいふべき激動期であつた。文明の最後を飾るものともいふべき奔放な時期であつた。普通ならば千年も二千年ものそれに匹敵する事の多い時代であつたといえよう。例えば、歴史が始まつてから私の生まれた一九一〇年までに、人類が掘り出した鉱物の量は、この六十年間の採掘量に及ばないという。いわば圧縮した歴史のパノラマを、高速映写機で見ることができたよつなものであつた。

先ず日本と世界を捲き込んだ二つの大きい戦争があつた。兵器の開発は異常な速度で進み、その物理的破壊力は、質量共に加速的な増大を見た。今日、局地的なゲリラ戦といわれるベトナムの戦いにおいて、ベトコンの一部隊がもつ火力であつても、優に第一次大戦に参加した大国のそれに匹敵するといわれている。核兵器となると、その破壊力は計量を超えた地球大のもので、学者はこの兵器を最終兵器と呼んでいる。核兵器が奉仕するような状況は最早勝ち負けを争う従来の戦争ではなく、交戦する何れの側をも破壊に導くだけでなく、地球自体をもこわしてしまふ程のものになつてきた。

戦争自体のもたらす物理的な破壊に加えて、戦争に伴うインフレは、経済機構の破壊と経済活動の麻痺をもたらした。またインフレは社会の秩序と構造、人々の地位と運命、更には目に見えぬ精神の深層にまで、根底からのゆさぶりをかけた。日本にとっては、軍隊や財閥の解体、地主や支配階級の没落はいつまでもなく、憲法とそれに依拠した制度や組織さえもが否定されるといふ結果をも招いた。

科学技術の世界にも革命的な進歩があった。その最も象徴的で集約的なものが、アポロ十一号の成功である。それは善い意味でも悪い意味でも大きい変化であった。未来に対するオプティミズムは色褪せ、鉛のようなペシミズムが、人類の大いなる苦悶を彩っている。最近学者は、この時代を「非連続」の時代として捉え、今日の政治、経済あるいは社会の構造変革は、最早過去の経験や知識では到底把握できない新しい時代が始まったといっている。これだけの広般にわたる深刻な変化は、歴史上空前のことであった。

第三に世界の構造が大きく変った。かつて七つの海洋に勢威を誇ったヨーロッパは昔日の栄光を失い、これに代わって米ソという二大巨人国家が出現した。その後暫らく世界を二分して米ソ間の冷戦的対立が続いたが、それが漸く平和的共存に移ったかと思うと、た

ちまち中ソ間の対立が始まった。そうした中であつて殆どの植民地は解放され、旧植民地はそれぞれみずからの必要とその充足とを目指して険しい自立の道を歩むことになった。南北問題が世界史に新しく登場してきた。一方、かつて権威をもつかに見えたイデオロギーは、ようやくその生彩を失い、イデオロギーの終焉を告げる向きさえ出てきた。かくて世界は一見多彩で多極的な構造をもってきたが、交通、通信の長足の進歩と物と知識の広汎な交流は、この世界をより小さい、より敏感な生活圏に仕立上げてしまった。その意味において、今日の世界は、中世の一小都市よりも小さく且つ敏感なものになつてきたといえよう。

3 反省と自誨

ところがその間にあつて、私は大きい波瀾もなく生き抜くことができた。私はただ生き永らえさせてもらったばかりではない。貧しい中でありながらも、父母や兄弟の慈愛と理解に支えられて、特別のひがみや生活上の痛苦を味わうこともなく、大学まで進学でき、よき師とよき友に恵まれた。卒業と共に大蔵省に拾われ、ここでも多くの相許したよき先

輩と友人に恵まれ、数々の貴い経験を積むことができた。また、どうしたはずみか遂に徴兵からも免除され、空爆下の東京で何度か身の危険にさらされ、住居や家財は戦災で全焼したとはいうものの、自分と家族の安全と衣食の充足だけは不思議にもこれを保つことができた。昭和十二年に結婚して四人の子女をもつたが、長男を病気で失った他は、他は何れも息災で成人した。

昭和二十六年、勧められるままに政界出馬を決意したが、翌年十月の初当選を含めて、私は今日まで総選挙を八回闘って八回勝つことができた。徳望や才幹に恵まれない私が、先輩の知遇を得て、昭和三十五年七月、内閣官房長官を拝命して以来、外務大臣、通商産業大臣、政調会長等の要職を歴任させてもらった。

ところで、私の郷里をとってみても、私の関与し或いは推進した事蹟は、確かに相当数数えることができる。学校や教育施設、河川や堤防、道路や林道、港湾や漁港、溜池や水路、農道や農業基盤、街路や上下水道等、各市町村に残るこれらの事蹟には、確かに、私の丹精の滴が残っている。備瀬瀬戸航路の浚渫と番の洲の開発、香川用水事業、瀬戸大橋架橋の促進、一連の塩業近代化の推進、三豊干拓の着手と完成等は、私が情熱と心血を注

いだ主なるプロジェクトである。中央地方をつなぐ政治のコミュニケーションや、子弟の進学と就職の斡旋、県内公私の団体や企業の経営上の相談等にも、不十分ながら、私なりの努力はしてきた。議員ないしは党員として、或いは国務大臣ないしは党役員として、内政外交を通じての国や党に対するこれまでの私の奉仕については、世人の評価に任せて、ここで改めて述べようとは思わない。これらの一切のことは、しかしながら、正直のところ、自分に与えられた公私の義務を曲りなりに、大過なくやりおおせたというだけのもので、特に誇るに足る功績であつたとはいえない。

一方、私は、自分から意識して、他者を欺いたり、他者に負担や迷惑をかけたたりしないよう極力みずから戒めてきたつもりである。それは単に人間としての他者に対する消極的義務であるにすぎない。しかし至らない私にとって、自分の怠慢や不注意によって、或いは一寸した誤解や中傷に基づいて、無意識の中に他者に迷惑をかけ、或いは他者に不快の思いをさせるようなことが数多くあつたのではないかと恐れている。

このように私は、これという取柄のない六十年のみずからの生涯を通して、数多くの友情と好意に支えられ、健康と幸福を享受してきた。また、公私にわたる自分の仕事を、と

もかくも大きい過誤なく手がけることができた。しかし、ここでその貸借対照表を作ってみるとしたら、おそらく、その姿は、借方に借記した数字があまりにも大きく、貸方に貸記した数字がそれに較べてあまりにも少ないことになるのではなからうか。

還暦を迎えて、私は六十一年目の坂に差しかかっている。これからの私の任務は、いうまでもなく、この借記した数字をカウンターバランスするため、精一杯努力しなければならぬ。西洋にも「人生は七十から」という諺がある。六十の発心も決して遅きに失するものではない。私は先ず、できる限りみずからの奢りと怠慢を戒めつつ、他者のために生きる工夫を重ねなければならぬ。すなわち己の好悪や地位の高下に捉われず、寛厚と誠実を以て人に接しなければならぬ。また事の公私や軽重、更にはその繁閑や難易に拘わらず、真剣に取り組まねばならない。事の中にあつて事を究め、事の外にあつて事に処してまいらねばならない。また六十の手習いではあるが、不断の学習に一段と力を入れなければならぬ。そして進退は天に問い、栄辱は命に従っていくべきだと思ふ。これが、これからの私にとつての自誨の道標である。先輩、友人各位の一層のご叱正とご鞭撻をお願いしたい。

(昭和四五・三・一一 私の誕生日に)